

【解 答】

腭リンパ上皮嚢胞 (lymphoepithelial cyst ; LEC)

解説：

腹部造影 CT においてオレンジの剖面様の濃染する隔壁を有する嚢胞性病変をみとめ、この段階では粘液性嚢胞腫瘍 (mucinous cystic neoplasm ; MCN), solid pseudopapillary neoplasm (SPN), 漿液性嚢胞腺腫 (serous cystic neoplasm ; SCN) などを鑑別に挙げた。しかし MRI では、T2 強調でそれほど高信号が強くない、拡散強調像で拡散制限 (高信号)、さらに MRCP において著明な信号低下をみとめたことから、嚢胞内容は液体成分ではなく、極めて粘稠度の高い粘液や血腫、あるいはケラチン様物質などの固形成分であることが疑われた。病変部位が腭尾部ではないことから、腭内副腭から発生する類表皮嚢胞 (epidermoid cyst) は否定的であり、リンパ上皮嚢胞 (lymphoepithelial cyst ; LEC) を最も疑ったが、MCN や出血をともなう SPN の可能性も否定できず、腭中央切除術が施行された。切除標本の剖面像では嚢胞内にオカラ状のケラチン様物質が充満しており (Figure 3 左)、病理組織所見では、嚢

胞壁は角化をともなう扁平上皮で覆われており、上皮下には濾胞形成をともなうリンパ組織をみとめたことから LEC と診断した (Figure 3 右)。

腭 LEC は、比較的にまれな非腫瘍性嚢胞性病変であり、病理組織学的には嚢胞壁は扁平上皮に裏打ちされ、その外側に胚中心をともなうリンパ組織が囲む二重構造を呈する。また、内腔にはケラチン様物質がさまざまな程度に含まれる。これまでの報告によると中高年男性に多く、約半数が無症状、残りの半数も腹痛や腹部不快感といった非特異的な症状のみでみつまっている。発生機序としては、①胎生期の迷入鰓裂 (bronchial cleft) からの発生、②腭周囲リンパ節における異所性腭の腭管上皮の扁平上皮化生、③腭管の一部閉塞による腭周囲リンパ組織内への拡張と扁平上皮化生、④腭管組織由来の真性腭嚢胞など、諸説が唱えられているが、一定の見解は得られていない。形態的には、腭から外側に突出するような発育形態を呈し、多房性あるいは単房性 (5 : 2) で、発生部位 (頭部・体部・尾部) に差はみられない。画像所見としては、造影 CT では被膜と隔壁のみが造影され、嚢胞部分は造影されないが、嚢胞内容を反映してその CT 値はやや高い。MRI では内部の角化変性物の液状成分と充実成分を反映して不均一な所見を呈するが、一般的には全体として T1 強調で低信号、T2 強調で高信号を呈する。しかし、内部の固

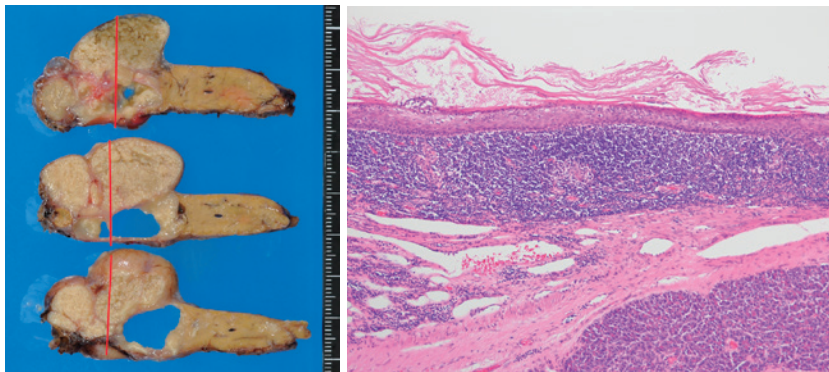


Figure 3. 病理所見：剖面の肉眼所見 (左) では、分葉状の嚢胞内に黄白色のオカラ状のケラチン様物質が充満しており、病理組織所見 (右：HE 染色 ×10) では、嚢胞壁は角化をともなう扁平上皮で覆われており、上皮下には濾胞形成をともなうリンパ組織をみとめた。

形成成分が多いと T1 強調での信号が高くなり，T2 強調での信号が低下し，MRCP ではさらに信号が低下して病変を認識しづらくなる．また，拡散強調画像で拡散制限がみられる¹⁾²⁾．なお，ERCP や MRCP では主膵管との交通はみられない．治療は，良性疾患であるため，確定診断が得られれば経過観察でよいと考えられるが，実際には確定診断が難しいことからほとんどの症例で手術が選択されている．

参考文献：

- 1) 祖父尼淳，糸井隆夫，辻修二郎，他：膵リンパ上皮嚢胞．別冊日本臨床 新領域別症候群シ

リーズ No 16 膵臓症候群（第2版），日本臨床社，東京，246-248：2011

- 2) 市川智章，山口晴臣：膵嚢胞性病変のCT・MRI診断．日本消化器病学会雑誌 116；979-993：2019

本論文内容に関連する著者の利益相反

：安田一朗（オリンパス株式会社，第一三共株式会社，ポストン・サイエンティフィックジャパン株式会社）

出題：安田 一朗（富山大学学術研究部医学系
内科学第三講座）